

# 小説の未来(16)

春日信彦

小説と科学の関係について  
述べたいと思います。

小説は娯楽の一つと述べてきました。娯楽だからこそ多くの人々に親しまれるといえます。小説での言葉は、読者の感情と知性に働きかけ、読者の喜怒哀楽を引き起こします。

小説の特徴といえる登場人物は、あくまでも実在ではなく架空の人物ですが、特に、この架空の人物が読者の喜怒哀楽を引き起こします。そこで、なぜ、架空の人物が多くの読者に親しまれるのでしょうか？

架空の人物ですから当然現実の人間とは違うのです。だからこそ面白いのですが、作者は非現実の人物と現実の人物のギャップを意識させて、単に、読者を楽しませているのでしょうか？

確かに、登場人物は読者を考えて描かれています。本来の目的は、架空の人物を想像させて、常識としてとらえている現実の人物を客観視させているのです。私たちは、日々現実に生きています。そして、人間関係を通して、現実を言語や五感で認識をしています。

現実にはあまりにも当然であり、身近であるために、無意識に、現実をありのままに認識していると思っています。また、私たちは、言葉と五感で現実を認識し、この認識したものを現実と思っています。

果たして、それらで認識したものは、現実とっていいのでしょうか？それは、違うのです。これは、まさに虚像の現実なのです。認識したものは、現実のほんの一部に過ぎず、しかも現実そのものではありません。現実という実態に言葉や感覚の認識で”近づいている”に過ぎないのです。

人間は、技術をもって現実の物質を創造できます。言い換えれば、ある物質を他のある物質に変化させることができます。例えば、鉄鉱石から鉄だけを取り出し、鉄鋼を作り、さらに車や船を作り出せます。これは、現実の実体を創造しています。

でも、言葉や五感で認識された物質世界は、現実ではないのです。つまり、物質そのものは現実に存在するのですが、人間の認識は、現実そのものではなく、“現実に近づく行為”といえるのです。

ほとんどの多くの人は、“認識と現実を同一視”してしまいます。というのも人は生まれた時から言葉と五感で現実をとらえているため、無意識に言葉と五感でとらえたものが現実と思い込んでしまうのです。

だから、読者は、言葉で構成された小説の架空世界と自分の言葉と五感で作上げた現実世界とを比較して、言葉の世界で楽しむことができるのです。言語と現実の関係を簡単に言えば、私たちは、生まれた時から現実を言葉に置き換え、無意識に、“現実と言葉を同一化”してしまっているのです。

## 未知なる脳

そこで、言葉と五感はどこで作られているのでしょうか？ご存知のように、脳です。そして、私たちは、脳で作られた言葉と五感認識を現実と思っているのです。だから、先ほど述べたように、私たちが知っている現実、脳でとらえたところの虚像と、いい程度の現実でしかないのです。

しかも、脳というものは、いまだ解明されてはいません。でも、そのことには無関心に、我々は、この未知なる脳で作られた言葉で作り上げられた虚像の現実をありのままの現実と信じて生きているのです。

生きていく上では、人間関係がうまくいく限り、信じている現実で支障をきたしません。でも、多くの人々は、人間関係で何らかの悩みを抱えています。この悩みの原因には、いろいろあるでしょう。

その原因の一つに、言葉で作上げられたその人の現実と他者が言葉によって作り上げた現実との摩擦にあるといえます。というのも、人は、生まれた時から無意識に各自の言葉で現実を作り、その現実を唯一無二の現実と信じ込んでいるからです。

おそらく、我々は、多忙な日常生活において、自分の考えや感情を客観的に理解することは難しいと思います。というのも、生まれた時から、”無意識に疑うことなく”言葉や五感で現実を認識してきたからです。

ほとんどの人は、成長する過程で人間関係で悩むときがきます。そして、その悩みの原因を完全に解明することは、できないと思われます。最悪の場合、悩みによる苦痛に耐えきれず、自殺する人もいます。

遺伝子レベルでの解析が可能となった現在でも脳については謎だらけです。人は生まれながらに脳を使っているのですが、日常生活においてほとんどの人は自分の脳について考えないでしょう。

脳をフル回転させて、AIという人工知能を開発できても、生物としての脳を作り出すことは不可能に近いように思えます。また、高性能ロボットを作り出せても、人間を誕生させる精子や卵子を人工的に作り出すことは、まだまだ先のことでしょう。

脳に関心を持たせた作品に安部公房の「R62号の発明」があります。ほんの少し紹介します。ここに登場する最新型天才ロボットR62号は人間の脳が移植されています。そして、R62号の試運転の時、人間の命令に絶対服従するようにプログラムされていたはずのR62号が、購入を考えていた主人に対し殺意を抱き、殺人を実行するのです。

というのは、主人と対面したR62号の頭脳に、突然、完全に消去されたはずの過去の憎しみの記憶がよみがえったのです。人間の脳とは何かを考えさせる感動的で面白い作品です。

歴史的なことはわかりませんが、人間は、当初はイメージを使って生きていくために必要なものを創造したと思われませんが、言語を作り出せるようになったころから、創造は飛躍的に成長したことでしょう。

そして、脳の進化とともに五感でとらえられる物質は言語化され、さらに、言語はお互いの意思を共有させるための手段となり、また、人に娯楽を与える手段にまで発達したと思われま

個人的な見解ですが、おそらく、小説は妄想から生まれたのではないかと思われま



一方、客観視された事実を記述する学術論文があります。それは実用性があるために多くの人々に支持され高く評価されてきたと思われます。小説ではどうでしょうか？小説は実用書ではありません。だから、工学、建築学、医学などのように現実的な生活に役立ちません。

小説は実務性では評価されないのですが、娯楽の点では支持されてきました。そのために、世界中には数えきれないほどの小説があります。小説にもいろんな内容のものがあると思われます。中には、妄想のようでもむしろ現実を直視したような作品もあります。

妄想は、どこから生まれてくるのでしょうか？意外なことに、実は、言語や五感でとらえた自分なりの現実が基盤となっているのです。その自分なりの現実があるからこそ、妄想は生まれてくるのです。妄想は確かに非現実なるものです。でも、妄想だから現実に役に立たないというもそうでもないのです。

一般的に科学といわれるものは、現実を直視してひたすら物質と運動を記号化していきます。そのことによって、現実になんげ近づこうとしているのです。一方、小説は、妄想によって現実から逃避しながら非現実世界に向かっているのです。

こう考えてみると、小説は非現実の世界を作り上げ現実を否定しているように思われます。ところが、場合によっては、現実逃避の妄想が現実になんげ近づくことにもなるのです。

例えば、地球の自転が証明される以前では、地球の自転は妄想です。だから、誰しも、地球の自転は笑い話となります。でも、地球の自転が証明されるとそれは、現実となるのです。

小説家は、妄想世界の創造者です。だからといって、現実を否定しているのではないのです。現実から逃避し、妄想世界をつくり、そこから今ある現実の世界を眺めているのです。

現実から逃避すればするほど、いずれは現実に戻ってくると思っています。つまり、自分が作り上げた常識としての現実世界は、妄想世界から眺めて初めて客観視でき、冷静に意識できるからです。

おそらく、現実には、物質と運動から成り立っているように思えますが、また、現実には常識と非常識から成り立っているといえないでしょうか。だからこそ、多くの人は妄想世界を楽しみ、未来に期待できるのではないのでしょうか。

私の小説は、人類にとって実現不可能とも思える共生が、妄想であり続けながら、現実には近づいてくれることを期待するものです。また、これからも、作家として人間という物質の未来を妄想し続けていきたいと思えます。